

「母乳育児奮闘記」

みやぎ母乳育児をすすめる会 監事 堺 武男

第 23 回

生まれたばかりの赤ちゃんは多くの能力を持っている...に違いない、その2

前回は早期母子接触で生まれたばかりの赤ちゃんが母親の乳頭に辿りつく能力について述べてみた。

さて、今回は早期母子接触からの赤ちゃんの動き、首を動かし、母親の乳首にパクッと吸い付き、まだ母乳は出てないが吸啜するという驚くべき反応を赤ちゃんの立場から考えてみることにする。

ところで、この文章は、2022.10の母乳フォーラムの伊藤朋子さんの発表に大いに触発され、目覚め、赤ちゃんの動きを赤ちゃん目線からもう一度見直すことによって生まれた考察によっている。

全ての哺乳動物は生まれてすぐにその母親の乳首にしゃぶりついて母乳を吸うじゃないか、ヒトもそうであるにすぎないよ、と言われればそうかもしれないが、そういう発想は自分が赤ん坊の時のこと等忘れてしまって（当たり前だが）、赤ちゃん目線ではなく、大人目線になっていることにまず私たち「専門家」は気付く必要がある。

実は赤ちゃんは大変な苦勞と能力を駆使して母親の乳首に吸いついているのである。

1. まず、指しゃぶりについて考える

では、いきなりだがまず赤ちゃんの吸啜について考えてみる。吸啜という行為は赤ちゃんが胎内にいる時に開始する指しゃぶりから始まっている。

赤ちゃんは胎内で指しゃぶりを開始している。これは超音波などで見る事が可能で、中には生まれた時に指しゃぶりによって既に吸いだこを作っている赤ちゃんもいる。この体内での指しゃぶりが出生後の吸啜運動の基礎になっている。ところで、これは多分あまり関心を持たれていないと思うが、指しゃぶりはほとんど親指であることだ。これは万国共通である。（もっとも、国なんて人類が発生した随分後になって人間が勝手に作ったものだから国に関係なく人類共通な行動があるのは当たり前のことかもしれないが）。これは多分、親指が吸いやすいこともあるが、母親の乳頭に一番親指の形が近いので、親指を選択しているに違いないと私は信じている。この胎内での親指への指しゃぶりが、出生後赤ちゃんが何のためらいもなくの母親の乳首に吸い付き、吸啜する運動を導き出している。この胎内での指しゃぶりは出生と同時に消失する。これには理由がある。大きな理由は、そこに母親の乳首があるから指など吸わないで乳首を吸えばいいし、その方が母乳も出てくるし赤ちゃんも楽しいに違いないということだ。もう一つは、これは生命の神秘とも言えることだが、胎内では羊水があるために浮力が働いている。胎児は、この浮力を利用して力を用いることなく自分の指を口にもってき吸うことを可能にしている。これが胎内での指しゃぶり＝吸啜運動を可能にし、支えている。ところが出生後は、羊水は無くなるため、浮力は消失してしまい、代わりに地球上の重力が登場する。赤ちゃんが指しゃぶりをするためには、この重力に打ち勝って自分の手を口を持ってこなければならぬが、出生後は前述の通り指しゃぶりの必要性は無くなり、母親の乳首を吸えばいい。指しゃぶりはその必要性もなくなり、また出来なくなるという訳である。これは何とも絶妙に作られた生命界の神

秘なのである。実はこの出生直後からの時期に指しゃぶりが自由に出来れば、赤ちゃんはそれこそ指と乳首との乳頭混乱を起こすかもしれない。

ちなみに、赤ちゃんは授乳・哺乳が安定してくる時期の2ヶ月になると、力もついてきて、重力に打ち勝ち自分の手を口に持ってこれるようになり、指しゃぶりも始まってくる。指しゃぶりには「自己鎮静作用」があるとも言われており、赤ちゃんも楽しんでいるのかもしれない、決して母乳が足りないからではない。不要な人工乳の補足などしないように、このことを母親には知ってもらおうとよい。赤ちゃんはこのような時間的経緯を経て母乳を上手に飲むようになる。胎内の時から頑張っているのである。

2. 授乳反射が持つ生命活動の意味

さて早期母子接触で母親の乳房に辿りついた赤ちゃんは、今度は乳首を探し当て、パクリと食いつき、そして指しゃぶりで練習した吸啜を行う。われわれ「専門家」はこの赤ちゃんの乳首を求め吸い付く一連の動きを「授乳反射」と呼び、3つの動きに分類している。

- 1) 探索反射：赤ちゃんの頬、唇、口の近くに指などで触れると乳首を探すような動きをしてそちらに口をもっていく。
- 2) 口唇反射：乳首、指を口腔内に入れると、しっかりくわえる。
- 3) 吸啜反射：それを強く吸う。

これらの一連の反射行動によって赤ちゃんは母親の乳首を吸うことが出来る、と理解され、教え伝えられている。

確かに赤ちゃんの動きは生来の反射行動として説明出来るかもしれない。

考えてみるとこの赤ちゃんの動きは、数百年前に人類が誕生してから、綿々と続いているのである。灯りなどなく、夜は本当に真っ暗な中（夜に灯りが使われ始めたのは歴史的にはつい最近のことになる）、しかも生まれて数カ月、視力は0.02程度であり、灯りも無く、何も見えない中で、どこに母親の乳首があるか分からなくても、まずその匂いを頼りに向かって行き、母親の乳首のあたりに辿り着く。そして自分の顔に乳首が触れると、というより乳首の方向に自分の顔を持って行き、乳首を探し当てるとそこに自分の口を持って行き（これが探索反射なのだ）、口唇—吸啜反射と我々が呼んでいる動きで乳首をくわえ、そして吸い、母乳を飲み込むのだ。我々はこの動きを赤ちゃん反射行動による、と理解しているのが、実はこれは赤ちゃんが生き抜くために行っている必死の生命活動に他ならないと言えないだろうか。

現在は確かに乳児死亡率1.0を切っているが、私が生まれた昭和の20年代でも200であった。いわんや古代においては生き抜くことは命がけであったと予想される。赤ちゃんたちはこの世に生まれると同時に400万年の間に生きる闘いを開始し、維持してきたのだ。この動きを我々は赤ちゃんの反射として当たり前のこととして赤ちゃんをのんびりと眺めるだけではなく、ひたすらな畏敬の念を持って小さな生命に接するべきだと考えている。

赤ちゃん頑張れ!!